

強引組長は雇われ婚約者を淫らに愛す

プロローグ 婚約者は名も知らぬ男

そのだはるこ園田春子は欠伸を囁み殺しながら、都内でも有名な高級ホテルのロビーを見回す。

広々としたロビーは解放感があり、天井も高い。見上げると大きなシャンデリアが煌びやかに光を放っている。

床や天井はベージュで統一され、ところどころアクセントとしてゴールドの装飾が散りばめられている。いかにも高級感溢れる空間だ。心なしか、ロビーにいる人もお金持ちに見えてくる。

こんなところ、仕事でもなければ足を踏み入れることはなかった。

環境美化用品会社に勤める春子は、営業部の社員からの指示で急遽契約書の紙原本をこのホテルに届けてほしいと頼まれた。営業事務という仕事柄、外出は基本的にはないので戸惑ったが、どうしても今日中に、という言葉と共に「直帰でいいから」と言われて諸手を上げて会社を出た。

たとえ自分が派遣社員だとしても、こんな高級ホテルに自社製品が置かれると思うとんだか誇らしい。

契約書を渡す簡単な仕事も無事終えたので、ここからは自由時間だ。

金曜日の夕方、直帰を許されているので、本当ならホテル内のレストランで食事でもして帰りたい

いところだった。

でもそんなお金の余裕はないし、何より眠い。今日は夜のバイトもないから、久しぶりに明日の昼までぐっすり眠れそうだ。

「おい」

突然、低い声が背後で聞こえた。

やけに響く声だなと思いつつ、はやくベッドに横たわりたい気持ちに駆られて早足でロビーを歩く。

「おい、待て」

「……はい？」

肩を叩かれて振り返ると、スーツ姿の男が立っていた。

先ほど契約書を渡した人でも、知り合いでもない。

「頼みがある」

そうは思えない春子を見下すような不遜な態度。身長が高いせいか、やけに威圧感がある。眉間に皺を寄せ、眼力も強い。漆黒の髪は清潔感があり、きつちりと黒いスーツを着こなしてネクタイも締めているのに、ただのサラリーマンとは思えない風貌だ。

おそらく二十八歳の春子よりは年上だろうけれど、顔立ちは若くも見える。それでも全体のオーラには貫禄があり、年齢不詳だ。

その迫力に見逃しそうになるが、鼻筋は通っているし顔立ちは整っていて男前だ。

ただ、それを凌駕するほどの目つきの悪さ。

「……な、なんででしょうか？」

男はどう見ても自分に声をかけているので、春子は恐る恐る返事をした。

「俺の婚約者になつてくれ」

「……は？」

その言葉に耳を疑う。

「婚約者のフリだ。フリをしてくれるだけでいい」

本物の婚約者ではなく、フリ。

さすがに本物の婚約者ではないことに安堵しつつも、やっぱり納得はできない。

「フリだとしても、なんで私が！」

赤の他人で、しかも数分前に初めて言葉を交わした人に婚約者のフリなんて、頼むほうがおかしい。

「地味な見た目が気に入った。ここに居るのは派手な女ばかりで気に食わない」

「地味!？」

とてもお願いをする態度とは思えない。

けなされていると腹を立てた春子は男を無視して帰ろうと背を向けた。

「頼む！」

すると背後からまた声がした。

そろりと振り返ると男は大きな身体をかがめ、春子に対して両手を合わせている。その異様な光景に周囲の視線を感じた。はやく切り上げて逃げたい。

「でも私、これから帰って寝たいんです」

断る理由を考えている余裕もなく、あまりの眠気に正直に答えていた。仕事だとか、予定があるとも言えなかったと思ったけれど、もう遅い。

「寝るだけならむしろ暇だろう」

予想がついていた返事だったが、春子にとっては重要事項だった。

「だめなんです。私、昼も夜も働いていて、このところずっと寝不足なんです！」

せっかく残業もなく、しかも定時よりもはやく家に帰れるのに、これで寝ないという選択肢はない。

ここまで強く主張すれば諦めるだろうと、男を睨む。

「……あんた普通の会社員だろ？ 昼夜働く理由は？」

「そんなのあなたには関係ありません！」

「それを理由に断るなら俺にも関係がある」

どういう理屈かわからない。でも凄まじるとその迫力に負けてしまいそうだ。

「……お金が必要なんです」

もう二度と会うこともない他人だからこそ、つい正直に答えてしまった。会社の人にも親しい友人にさえ言えないことだった。

「なんだと？」

男の眉間の皺がさらに深くなる。やはり他人に話す内容ではなかったみたいだ。

「つ、な、なんでもないです！ とにかく無理です。では！」

こうなったらもう走って逃げるしかない。

そう思っただけから背を向けて一歩踏み出した瞬間、力強い手に腕を掴まれた。

「待て。金が必要なのか？ それなら婚約者のフリをしてくれれば一日十万……いや、二十万払う。これならどうだ？」

彼の言葉に、勢いよく振り返る。

「二十万円、しかも一日で!？」

想像以上の報酬にぐくりと息を呑む。今の春子には何よりお金が必要なのだ。しかも短期間で一気に稼げるなんて、さらに好都合だ。こんなにいい話はない。あまりにいい話すぎて怪しいくらいだ。

「……婚約者のフリをすればいいだけですか？ 他には何もしなくていいですか？ それで一日二十万円……？」

「ああ、もちろん」

念押しすると彼は力強く頷いた。まだ半信半疑だったけれど、まっすぐ春子を見つめてくる視線に嫌なものは感じなかった。頭の中でぐるぐると考え、天秤にかける。眠気とお金。赤の他人の婚約者のフリをするだけで、一日二十万円。どう考えても、得しかない。

「……わかりました。やります」

結局お金につられて承諾していた。

「ありがとう、助かる。ではこっちに來てくれ」

またしても腕を掴まれ、強く引かれる。

自分の力の強さがわかっていないのか、掴まれているだけに腕に激痛が走る。

「い、痛いです！」

「……ああ、悪い」

手が離れたと思ったら、今度は男の視線が春子の全身を上から下まで嘗め回した。

「服装も地味だが、ちょうどいいだろう」

さつきから失礼なのかそうでないのか、微妙な発言。

オフィスカジュアルが許されている職場ではあるが、春子は服を選ぶ面倒さと節約から、毎日スーツを着ていた。

「それで、どこに行くんですか？」

「見合いだ。そこで俺の婚約者のフリをしてほしい」

「わ、わかりました」

心の準備ができないまま、男に連れられてロビーの奥へ進み、ホテル内の和食レストランへ入る。さらにその奥の個室の前で立ち止まった。

「悪い、待たせた」

男が扉を開いた瞬間、中にいた人たちの視線が一斉に春子と隣の男に注がれる。

婚約者のフリをすと言っておきながら、男の名前すらまだ聞いていなかったことに思い至る。

何か聞かれてしまったらまずいと手のひらに汗が滲んだ。

けれど何よりも、向けられた視線の先にいる人たちの迫力に圧倒されていた。

広間の中央にあるテーブルを挟んで右手には、奥から男と若い女が座っている。そして左手にはやたらと貫禄のある険しい表情の男。

「……その女性は何？」

右手奥に座っている男が眉根を寄せ、こちらを睨む。

その迫力に身が縮こまる。これはいったい、どういう人たち？ どうしてこの場にいる男たちは全員目力がとんでもないのか。

「俺の女だ。結婚することにした」

肩を抱き寄せられ、ふらつきつつ男の身体に密着した。春子は黙ったままこくこくと頷くことしかできなかった。

「……虎将、^{とらまさ}どういふことか説明してくれ」

右奥の男は冷静な声で、けれど刺々しい声音で隣の彼に問う。「とらまさ」と呼んでいたのです。それが彼の名前なのだろう。

男の隣に座っている若い女は可愛らしく、着物姿がよく似合っている。可愛いなあとぼんやり見ていると、さらに強く身体を引き寄せられた。

「こういうことだよ」

不意に視界が隣に立っていた男の姿で覆われる。

「んっ……!」

男の唇が、春子の唇を奪っていた。

自分の身に起きていることが信じられなくて目を見開いた。力が強く乱暴で強引な男の唇は、驚くほど優しくふわりと触れていた。キスされたこと以上に、それが春子にとっては衝撃だった。

ゆっくり唇が離れていくと目を開きっぱなしだった春子は、男と目が合った。ついさっき会ったばかりなのに初めて男の温もりを感じたせいで、鼓動が強く鳴り響いている。

「……というわけで、見合いはなかったことにしてくれ。じゃあな」

「おい、虎将!」

呼び止める声も無視して来た道を戻っていく。大股で歩くせいで無理やり肩を抱かれている春子の足はもつれてしまいそうだ。

「ま、待つて。はやいです!」

「……しかたないな」

男は面倒そうにしたあと、春子の腰を抱えて持ち上げた。あまりに簡単にひょいと身体が浮く。

「え、ええ、ちよっと!」

正面から抱きかかえたまま、男は歩き出した。

一気に視界が高くなり、不安定な体勢に男の肩に手を置かざるを得ない。

「このほうがはやい」

「だからって、これは……!」

大人としてあまりにも恥ずかしい格好だ。前を向いている男にはわからないだろうけれど、ホテルのスタッフやお客さんの視線が春子に集中していた。

隠れてしまいたいくらいの羞恥に、春子は思わず男の首に手を巻き付けて首元に顔をうずめる。すると、春子を抱えている男の腕の力もさらに強まった。

抱きかかえられたままホテルを出ると、入り口に黒いベンツが停まっただけで、春子たちの姿を確認するなりドアが開いた。運ばれるまま後部座席に乗り込むと、隣には男が座った。

「事務所まで頼む」

「承知しました」

運転席の男と同じようなスーツ姿の男がミラー越しにこちらを見て、すぐに車が発進する。

「これから事務所に行く。そこでも俺たちは婚約者ということにしといてくれ」

運転している男にも気取られたくないのか、男は小声で春子に話しかける。

空気を読んで、春子も声を小さくした。

「い、今の人はなんだったんですか？ ていうか私、まだあなたの名前も知らないし、事務所ってなんですか」

「ああ、そうだったか。俺は吾妻虎将^{あづま}。あんたは？」

「……園田春子です」

「春子か。よろしく頼む」

承諾をしてからの勢いがはやりすぎて頭がついていかない。それに、身体も。

そうだ、さっき私はこの人とキスを――

思い出すと身体がカッと熱くなった。目の前の虎将の唇に勝手に目がいってしまふ。

「キ、キスまでするなんて聞いてません!」

「婚約者ならして当たり前だと思っただけ……嫌だったか？」

「嫌とか、そういう問題じゃなくて、あくまでフリという話ですから!」

「そうか。嫌ではなかったのか」

初めて虎将が笑った。純粹な笑顔ではなく、怪しげに口角を上げただけだったが。

「そ、それでさっきの人たちは、どういう人たちなんですか？」

「俺の見合い相手だ。それから俺の親と相手の兄」

「今日、お見合い予定だったんですね」

「ああ。強引に設定されて逃げようとしていた。結局あとから責められるだろうから、春子がいって助かった」

強引な行動のわりに殊勝な態度を取るので、責めようにも責められなくなる。

「……お役に立てたのならよかったです」

「金はあとで払うから」

「は、はい」

一日二十万円。

そんなことが本当にあり得るのか。いまだに現実味がない。引き受けてよかったのかと、まだ迷

いはある。それでも今の生活から抜け出せるなら、少しくらいの犠牲は必要なのだ。
車で走ること一時間、ようやく停車したので降りる。

虎将に連れられるまま、目の前の年季の入った三階建てのビルに入っていく。

「ここが俺の事務所だ」

事務所？ 芸能プロダクションとかそういう類のものだろうか。そういえば、先ほどは答えを聞けずじまいだった。エレベーターで二階に上がり、正面にあるドアを開く。

「組長、ご苦勞様です！」

ドアを開けた瞬間、男たちの太い大きな声が響き、春子は肩をびくりと震わせた。

十人ほどのスーツ姿の男たちが花道を作るように左右に並んで頭を下げている。

異様な光景に春子は立ち尽くしていた。いや、それよりも。

今、組長って言った？

「組長、そちらの女性……？ 今日は見合いのはずでは」

「紹介する。彼女は春子だ。見合い相手ではなく、俺の婚約者だ」

先ほどと同じように虎将は春子の肩を抱き、そう発表した。

「……えええええ！」

一瞬の静寂ののち、男たちの低い声がフロアに轟き渡った。

「見合いをするとは聞いていましたが、彼女がいらっしゃったんですか!？」

「そんな、あの組長に女が……」

明らかに動揺する男たちの中で、虎将は堂々としている。

彼女がいることがそんなに驚くようなことなのか、数時間前に出会ったばかりの春子にわかるわけがない。

「今後、春子もここに顔を出すこともあるだろうから報告しておく」

啞然としていた彼らは視線を一気に春子へ集中させ、同時に頭を下げる。

「……姐さん、よろしくお願いします！」

「あ、あねさん？」

困惑したまま虎将を見上げると、一度だけ頷く。

まったく意味がわからないけれど、頭を下げている彼らへの礼儀として春子も頭を下げた。

「園田春子です。よ、よろしくお願いします」

顔を上げた若い男たちは、真剣な顔をしてもう一度「よろしくお願いします！」と野太い声を上げた。

「よし、次に行くぞ」

「え、ええっ」

呆気にとられたままの春子は、また強い力に引き寄せられて歩き出した。

そして事務所と呼んでいたその場所をあとにすると、またしても車に乗り込んだ。

「あ、あの吾妻さん」

「虎将だ」

「え？」

「虎将と呼べ」

妙な威圧感に春子は息を呑んだ。

「……虎将さん、今の場所はいったいどこで……」

「着いたぞ」

「もうですか!？」

質問する暇もないうちに、また次の目的地に到着したらしい。にしても、車に乗ってまだ五分も経っていない。促されるまま車を降りると、地下駐車場だった。駐車場内にあるエレベーターに乗り込み、上がっていく。

「それで、今度はどこに連れてこられたんでしょうか……」

先ほどの古いビルとは違って、今度はどこの高級ホテルかマンションかと思ってしまうほど、エレベーターも高級感があるし、セキュリティもしっかりしている。

エレベーターからは、最上階の三十階で降りた。

先ほどの『事務所』の様子からしても、虎将が普通の人とは思えない。彼は『組長』と呼ばれていたし、あの雰囲気はこの見た目。ほぼ確実に極道組織の人——つまりヤクザだ。

意識すると、戸惑いとはまた違った恐怖が沸き上がってくる。ヤクザのやっていることなんて興味もなかったのでまったくわからないけれど、悪いことをしているのは当たり前くらいに思っていた。

それから、自分とは一生関わりのない人たちだとも。

「入れ」

戸惑いながらついていくと、虎将はドアの前で立ち止まった。というか、最上階は見渡す限りドアが一つしかない。

「……ここは？」

「俺の家だ」

「ここがですか？」

高級マンションのしかも最上階。極道の人がこんなところに住んでいるとは想像していなかった。ドラマや映画から、日本風のお屋敷に住んでいるイメージだった。

「ああ。セキュリティは万全だから安心するといい」

——そういう問題ではなくて、あなた自身が危険なんですけど。

口にしたくなる言葉をぐっと呑み込むが、さすがに中に入るのはためられて一歩目が踏み出せない。彼が安全な人だとは限らないし、ましてやさつき呼ばれていたとおりなら組長。警戒しないほうがおかしい話だ。

「ほら、はやく入れ」

「あっ！」

背中を押され、玄関の中へ一歩二歩と踏み出してしまった。背後でドアが閉まり、鍵まで閉める音にドキッとする。途端に逃げ出したくなってきた。

まだ間に合うかもしれない。内側から鍵を開けて外に出るなら今だ。お金は欲しいし、婚約者のフリをするのも問題ない。ただ、彼の職業が気になるだけだ。春子はそつとドアノブに手を伸ばす。「何してるんだ？」

声をかけられ、肩がびくと跳ねた。

前を向くと、こちらをじつと見ている虎将と目が合った。それから、彼の奥に見えるリビングの景色。

「うわ、すごい……」

春子は引き寄せられるように、中へと足を進めていた。玄関からして物が少なく、モデルルームみたいだ。廊下を抜けると広々としたリビング。リビングも物は最低限しかなく、テレビとソファ、それからテーブルのみ。大きな窓からは高層階からの良い眺めが見える。障害物も何もなく街を見下ろせる場所に住んでいるなんて、春子からしたら考えられない。

虎将がこんなマンションに住んでいるのも驚きだったけれど、何よりも春子は、自分の知らない贅沢な空間にぼんやりと部屋中を見回していた。

「座ってる。コーヒーでいいか？」

言葉にできなくて、こくこくと二度頷いた。

黒の革張りの二人掛けソファの端にそつと腰を下ろす。すっかり逃げるタイミングを失ってしまった。

「コーヒー。豆から挽いているからうまいぞ」

「……ありがとうございます」

「砂糖とミルクも適当に使ってくれ」

「は、はい」

マグカップに入ったコーヒーに視線を落とす。

こんなに丁寧なコーヒーを淹れる人なんだ。虎将のことを知れば知るほど、よくわからなくなってくる。なのにただなんとなくまだ警戒心がほどけなくて、コーヒーを口にできない。

隣に座った虎将はコーヒーをおいしそうに飲んでいる。

「……虎将さん、ちょっと聞いていいですか？」

「ん？」

逃げる前に確認しなければいけないことがある。ほぼ確定しているけれど、ほんの少しの希望を込めて。

「もしかして、虎将さんのお仕事って、あの、ヤクザというか……」

濁して聞きたかったのに、結局曖昧な言葉が出てこなくてストレートに聞いてしまっていた。

「ああ。言ってなかったか」

「聞いてませんっ！」

「そうか、悪かったな」

虎将があつさりと謝ったので春子は責める気になれなかった。

「神代^{かみしろ}会、って聞いたことはないか？」

「……まあ、ありますけど」

関東でも大きな極道組織だった気がする。でも、たまにニュースで名前を聞くくらいだ。組同士の抗争がどうか、一般人の春子にとってはまるで現実味のないニュースなので聞き流すだけだった。

「その中の一つに吾妻組がある。俺はその組長をやっている」

「……え……？」

組織構成はよくわからないけれど、関東の有名組織の中の組と聞くと、ものすごく大きな勢力な気がする。

「ということは、けっこう大きな組織なんですか？」

「そうでもない。神代会の中でも吾妻組よりでかい組は多い。吾妻組は上から……五番目ってところか」

「五番目……」

詳しく聞いてもやはりピンとは来ない。全体でいくつ組があるのかもわからないけれど、上から数えたほうがはやくくらいなら、ある程度の勢力はありそうだ。

「で、さっきのが吾妻組の事務所。若い構成員が常駐している。俺も基本的にはここか事務所にいる。何かあった時は春子も顔を出すことになるかもしれない」

「は、はい」

——何か、って何？

やっぱり普通の生活とは違うのかと嫌な予感しかない。もし悪事や犯罪などに絡んでしまったらと考えると、お金どころではなかった。

「虎将さん。あの、この話はなかったことに……ってできませんか。まさか相手がヤクザだなんて思わなかったの……」

今断ったりしたら、どれほど怒られるか想像もつかない。だんだん怖くなって、言葉尻が弱まって最後は俯いていた。

「……春子はそれでいいのか？」

「え？」

落ち着いた声で問われ、怒られなかったことに驚いた。

「金が欲しいんじゃないのか？」

言葉に詰まる。お金は喉から手が出るほど欲しい。

でもだからといって、極道の妻のフリなんてできそうもない。

「そもそもどうしてそんなに金が欲しいんだ。見たところ、無駄に着飾っているわけでもないし、ブランド品の収集癖でもあるのか？」

春子は笑いながら首を振った。

誰にも話していないことを虎将に話すのはためられる。でも、よく知らない他人だからこそ曝け出すこともできる。

「……実は、借金があつて」

「いくら？」

「……二十万円です」

「それは、けっこうな額だな」

「はい。闇金の取り立てがすごくて、一刻もはやく返したいんです」

「闇金にまで手を出したのか」

ゆっくり頷いた。滞納からしばらく経過しているので毎日のように催促の電話がある。少しずつは返しているけれど、安月給では利息を返すだけで精一杯の日々だった。

「それなら俺の婚約者のフリをするだけで一日二十万。四か月もあれば釣りが返ってくるほど稼げる。いい話だろう。普通に働いても返せる金額じゃないぞ」

「……でも」

もう二度とこんなチャンスはない。でも極道の婚約者だなんてどうなるかわからないし、想像もつかない。当然、犯罪に手を染める気はない。

「具体的に何をすればいいんですか？」

「俺の婚約者として、しばらく隣にいてくれるだけでいい。俺の一番の目的は、今日の見合いの回避だ。それも済んだ今、別れたことにしてもいいが、そうなればまた見合い話が来る。完全に諦めさせるためにも、ある程度の期間はフリを続けてほしい」

「……ヤクザのお仕事を手伝ったりはできませんよ？」

「当たり前だろ、したいと言っても俺がさせない」

即答すると彼は立ち上がり、リビングから出て行く。そしてすぐに戻ってくると、封筒をテーブルの上に置いた。

「婚約者のフリをやめるにしても、もう少し稼いでからでもいいんじゃないか？ ほら、今日の分の二十万」

派遣社員で働く春子にとっては月給よりも多い金額だった。それが一日で手に入るなんてこれほどの条件はない。闇金に追われる日々を考えたら、極道の妻も似たようなものだ。四か月ほど我慢すればいいだけ。それなら相手が誰であつても、乗らない手はない。

「でもこれ、悪いお金なのでは……」

ヤクザの持っているお金となると、映画などの知識くらいしかないが、人からお金を巻き上げているイメージだ。どこかで誰かが苦しんだお金を受け取るなんて、春子は嫌だった。

「まさか、俺が働いて稼いだ金だよ。もちろん合法的で正当な収入だ」

彼は自信満々に答える。まだすべてを信じきることはできないが、初対面の相手に向かって容姿が地味だとはつきり言うような男だ。嘘をついている可能性は低そうだ。

そして何より、春子はお金が欲しかった。

「……わかりました。よろしく願います」

「ありがとう。契約成立だな。……じゃあ」

虎将が春子ににじり寄る。距離が詰まると、逆に春子は距離をとる。そうこうしているうちに、ソファから落ちそうになるところまで追いやられていた。

「俺の婚約者らしく、もう少し色気が欲しいな」

色気については言い返せない。お金がないので美容院もしかたなく半年に一回行くくらいだ。染めるにも維持するにもお金がかかるから、髪は真つ黒なまま。一つ結びが楽なので、ここ数年はずっとセミロングだ。仕事ではスーツだし、夜のバイトも着古した服で色気には程遠い。

だとしても、今この状況では関係のない話だ。

太い腕が伸びてきて春子の腰を絡めとる。引き寄せられ、一気に距離が縮まった。

すぐ近くで春子の目を見つめる鋭い瞳。

「な、なんですか？」

そういえば数時間前、この人とキスをしたんだった。怒涛の展開で忘れていたけれど、この距離にあの時のことを思い出す。一瞬触れた唇はひどく優しく、見た目や態度とのギャップに驚いた。またキスをされそうな距離に、自然と鼓動が鳴り始める。

でもそれは婚約者のフリをしていたからで、二人きりの時はキスする必要はない。あの時は婚約者だと見せつけるためにしたとわかっている。その証拠に、こんなに近づいているのに唇は触れない。

ただ、その代わりに――

「何してるんですか！」

見つめ合っている間に、虎将の手は春子の着ている白いシャツに伸びていて、ボタンを一つずつ外している。

「脱がしてるだけだ」

彼の手は止まらず、春子のシャツのボタンをすべて外してしまった。はだけると下着が見える。

「ちよつと……こういうことしないって」

「そんなこと、誰が言った？」

――そういえば、言っていない。

「で、でも、ただ隣にいればいいって言ったじゃないですか！」

「隣にいるのもいろいろあるだろ」

虎将の強い力で軽々と体勢を変えられ、ソファに押し倒された。

その瞬間、くらりと眩暈がした。いや、これは眩暈ではなく――

「ほ、本当に待ってください」

弱々しく虎将の身体を押し返す。

「怖くなったか？」

「そうじゃなくて……とにかく、眠い……」

瞼が勝手に下りていく。そういえば、今日は帰ってすぐに寝るつもりだった。蓄積された眠気が一気に襲ってくる。

「え？ おい」

戸惑う声が遠のいていく。そろそろ限界だったみたいだ。

ヤクザの婚約者のフリだなんて、とんでもない契約を結んでしまったのかもしれない。

でも今は、何かを考えることもできないくらい、春子は睡魔に襲われていた。

「ん、ん……」

めずらしくたっぷり眠ったからか、自然と目を覚ました。なんだか強烈な夢を見た気がする。ぱちりと目を開くと真っ白い天井が目に入る。これは自分の家と同じ色だ。でも、寝心地がいつもと全然違う。

「……ここ、どこだっけ」

ゆっくり起き上がると大きなベッドの上にいた。ベッドに敷かれたシックな黒いシーツは、春子の家の白いシーツとは正反対だ。それに、大きさがまったく違う。ダブルベッドくらいの大ささので広々としていて寝心地がよく、二度寝したいくらいだった。

昨日の記憶を手繰り寄せる。確か昨日は仕事でホテルに行つて、すぐに帰ろうとしていたのに――

「おう、起きたか」

「……ひっ！」

ドアが開き、突然現れた男の顔に春子は声を上げた。

「なんだ、その顔と声は」

男は春子の悲鳴に怪訝な顔をする。

その眉間の皺が怖くて、昨日の出来事を思い出した。

「あ……虎将さん？」

「ああ、おはよう」

「……おはようございます」

どうやら夢ではなかったみたいだ。

がっかりしたような、金銭的には助かったような、複雑な気持ちだ。

「よく寝たみたいだな。朝食食うか？」

「え？ はい、食べたいです」

「わかった。風呂も入るよな？」

「あ……入りたいです」

「洗面所に一式用意してあるから、好きに使ってくれ。その間に俺は朝食を用意しておく」
素っ気なく言い、彼は寝室から出て行った。

「……ありがとうございます」

頭がまだぼんやりしているのと、虎将の口から出てくる意外な発言に呆気にとられた。

昨夜は会社終わりで虎将に捕まり、そのままこの家に来て、眠ってしまったんだ。お風呂も入っていないので少し気持ちが悪い。すぐ家に帰ることもできそうにないので、お風呂を借りられるのがあるがたい。

ベッド脇に置いてあったカバンからスマホと化粧ポーチを取り出す。時間を確認すると、もう朝の十時だった。

「うわ、こんな時間まで寝てたんだ」

いったい何時間寝ていたんだろう。でもおかげで頭がすっきりしている。このところ、ろくに睡眠をとれていなかったけれど、長時間の睡眠とこの大きなベッドのおかげだろうか。

というか、昨日はリビングにいた気がするけれど、虎将がベッドまで運んでくれたのか。

寝室を改めてぐるりと見回すが、リビング同様に無駄な物はなく、ベッドとサイドテーブルとスタンドのみ。黒を基調とした部屋は朝なのに暗い。ベッドから降りるとカーテンを開けた。いつきに明るい陽射しが差し込む。

「いい景色……」

リビングからの眺めとは少し角度の違う景色が眼下に広がる。何度見ても良い景色だ。いつまでも見ていられそうだけど、はやくすっきりしたいので、春子は化粧ポーチを持ってベッドルームを出た。

玄関のほうへ向かう途中に洗面所がある。中へ入ると、その広さにまた驚いた。大理石でできた大きな洗面台が設置されている。鏡も大きく、照明が煌々としているので、自分の情けない姿がよく見えて目をそらした。

中を見ようとバスルームに続くガラス戸を開け、思わず息を呑む。

「バスルームもすごい……」

きれいなうえに、やたらと広い。この家はいたいどれほどの広さがあるのか。そもそも最上階のどこからどこまで住まいにしているのかも気になる。彼のことを知るたび、春子の中のヤクザの

イメージが覆されていった。

全体的にデザインが凝っている。テレビもついているし、バスタブも大きい。ゆっくりくつろげそうな空間に、今から入るのが楽しみだ。虎将はお湯を張ってくれたのですぐに入ることができる。しかも脱衣所にはタオルや着替えまで用意してある。ここまで用意がいと、もしかして女性が頻繁に泊まりに来ているのかと勘繰ってしまう。それはまさにヤクザのイメージだ。

とはいえ、婚約者のフリでしかない春子には関係ない。さっさと服を脱いで、バスルームに入った。

ボディースーツやシャンプーなどもちゃんと用意してある。虎将が使っているとは思えないのでやはり女性用だろう。怒られないかな、と思いつつ拝借した。

自分の家では味わうことのない空間を、時間をかけて堪能する。

睡眠不足が解消された次は、思いもよらない癒しの時間を過ごしてしまった。

お風呂から上がる頃にはすっかり疲れも取れていた。

鏡を見ると、お風呂に入る前に映った自分とは別人のように肌がつやつやしている。

「お風呂、ありがとうございます。着替えまで用意していただいて……」

着替えだけでなく、下着も様々なサイズが数種類用意されていて、戸惑った。けれどタグがついていて新品だとわかったので、タグを切って使わせてもらった。

「ああ、サイズは大丈夫だったか」

「はい。全部新品だったみたいですけど……いいんですか？」

「昨日のうちに組員の女に用意してもらった。どんなものかは見ていないから安心しろ」
「そうですか……」

こんなに態度は偉そうなのに、細やかな気遣いができることに驚く。

「朝食ができているから、ソファで待つてろ」

朝起きてから至れり尽くせりで戸惑ってしまふ。昨日押し倒されたソファに座り、リビングからキッチンにいる虎将を眺める。

オシャレなアイランドキッチンに立っている虎将はどうも違和感が大きく、物珍しさにじっと見ている。

そうこうしているうちに、テーブルにお皿がいくつか運ばれてきた。想像以上にきちんとした朝食だ。ごはんにお味噌汁、鮭の切り身にサラダ。

「おいしそう……これ虎将さんが作ったんですか？」

「まさか。下のコンビニで買ったものを温めただけだ。レトルトばかりで悪いな」

「いえ、用意してくれてありがとうございます」

ギャップを感じさせる彼でも、さすがに料理上手というわけではないみたいだ。にしても、レトルトやおかずのパックをそのまま出すのではなく、お皿に盛る几帳面さは意外な一面だった。

手を合わせて用意してくれた朝食を食べる。普段は貧乏飯を作るために自炊しているため、コンビニのお惣菜すら久しぶりに口にする。子どもの頃に食べた時よりもおいしくなっていて感動した。
「おいしいです……！」

「コンビニ飯でそんなに感動している女、初めて見た。普段はどんな食事してるんだ？」

虎将は白米を頬張りながら笑った。

「モヤシ炒めとか、モヤシスープとか、たまごとかですね」

「……それ、栄養あんのか？」

「栄養よりお金ですよ」

安い材料でどれくらいお腹が膨れるかが大事。おかげで料理の腕前は上がった。

ただ、その腕を振るって作る料理がモヤシ炒めなのは悲しい。

「だからそんなに痩せて色気が……。春子はいくつだ？」

「……二十八ですけど？」

「そのわりには……」

虎将の視線がわざとらしく春子の身体を上下する。

春子は咄嗟に自分の身体を手で隠した。

「セクハラですよ！」

「セクハラも何も、婚約者なんだからいいだろ」

「フリですから、フリ！ 虎将さんこそ何歳なんですか!？」

見た目的には貫禄があるので年上だということはわかる。
四十代ではないだろうな、というくらいだった。

「三十五だよ」

「……それは老けています」

別にそこまで驚く年齢でもなかったが、仕返しのもりだった。

「……わかつてる」

虎将はむすつとしてしまった。

子どもっぽい部分があるんだな、と笑いそうになるのを堪えた。

「虎将さんはいつもこんな食事なんですか？」

「まさか。今日は春子に合わせただけだ」

「……それは、ありがとうございます」

見た目とのギャップがある優しさに、不覚にもときめいてしまった。

その時、春子のスマホが鳴った。ちらりと表示を見て無視する。

今は久しぶりのちゃんとした食事を堪能したい。そもそも、電話に出る気はなかった。

「出なくていいのか？」

「あ、ごめんなさい。切りますね」

スマホを手に取り、音だけではなく電源まで切った。今日は土曜日だというのに、いつも通りしつこい電話だ。

「誰からだ？」

「借金取りです。毎月少しずつ返してはいるんですけど、全然足りないので催促がすごくて」

「……そうか」

虎将は食事中だというのに立ち上がり、またすぐに戻ってきた。昨日と同じように、その手には茶封筒がある。

「今日の分、二十万。昨日のと合わせて四十万。あとで一緒に返しに行くか」

「え……？」

「一度にこれくらい渡せばしばらくは黙るだろ。しつこい電話もやめろって俺が言ってやるよ」

「それは助かりますけど、いいんですか？」

「ああ。俺の婚約者だからな」

「……そうでした」

婚約者のフリと言っても、お見合い現場に顔を出した程度だ。今はまだ彼の婚約者のフリをしている実感などまるでない。

「それから、一緒に住むから春子の家は解約してくれ」

「え!？」

「借金もあるし、一緒に住んだほうが節約になるだろ」

確かにそれは一理ある。だとしても、急に一緒に住むというのも抵抗がある。

「そうですね、でも婚約者のフリは期限がありますよね。その時に帰る家がなくなっちゃいます」

「そうだった時には俺が手配してやるよ。どうせ今はろくな家に住んでないんだろ？」

「ええ、まあ……」

家賃優先で選んだので、住んでいるのは古くて狭い木造アパートだ。否定できないのが悔しい。

このまま彼に頼り続けていいのだろうかという葛藤はあるが、今までとこれからの苦労を考えると甘えなくなる。それに、一緒に住むならアパートの家賃は確かに無駄だ。解約すれば、その分借金返済にもあてられるし利益しかない。一度引き受けてしまったのなら、とことん彼に身を任せたほうが得だ。狡猾な考えかもしれないけれど、ヤクザ相手ならそれくらいずる賢くていい気がする。

「ありがとうございます。では、しばらくお世話になります」

「そうと決まれば、食べたら出かけるか。なんて闇金だ？」

「ええと、ヒガシキャッシュサービスです」

「……そうか。わかった。それから春子の荷物も取りに行くか。すぐに必要なものもあるだろう」

「助かります」

そうと決まればやらなければいけないことが山ほどある。アパートの解約と引越、急に忙しくなってしまった。昼の仕事と夜のバイトの合間にできるかどうか、心配だ。

虎将が作ってくれた朝食を終えて駐車場に行くと、昨日とは違う黒のボックスワゴン車が待っていた。後部座席に二人で乗り込んで、後ろを見ると、畳んだ段ボールが数枚積まれていた。運転席には、昨日と同じ男だ。

「ヒガシキャッシュサービスまで頼む」

「え？ あ、はい！」

運転席の男はカーナビに行先を入れるとすぐに発進する。

「そういえば、紹介してなかったな。運転しているのが吾妻組の若頭。陽太だ」

「あ、藤田陽太です。よろしくお願いします、姐さん」

ミラー越しに目が合うと、会釈された。

「こちらこそよろしくお願いします。……でも若頭さんってけっこう偉い人なので……。運転手なんですか？」

若頭といえば、組長の次に偉い立場の人のはずだ。

そんなすごい人が運転手をしているのも違和感がある。

「まあ、たまに護衛兼運転手をやってるって感じっす。お気遣いどうも」

「ああ。昔からの関係が抜けないって感じだな」

「そうなんですネ……」

昔のことをどこまで聞いていいのかわからず、春子はそれ以上何も言えなかった。

「春子、陽太に浮気するなよ？」

急に虎将に肩を抱かれ、引き寄せられる。

「浮気!？」

至れり尽くせりで油断していたけれど、フリでも彼は婚約者だ。

昨日もキスをされたし、服を脱がされかけたんだった。しかも『浮気』だなんて。

「あの、虎将さんっ！」

彼の身体を押し返すも、力が強くて離れてくれない。

「ちよっとちよっと。オレのいるところでイチヤつかないでくださいよ！ それに組長の婚約者さんに手えなんか出したら、オレがどうなるか……」

婚約者なら強く拒否するのも変かとハツとする。だとしても人前で堂々と抱き合うなんて恥ずかしくてできない。

「わかつてるって。な、春子」

同意を求められても、どう返事をしたらいいかわからない。

「もう離れてくださいってば」

思い切り力を込めると、ようやく虎将の身体が離れていった。

「なんだよ、つれねえな」

「人前ですからっ」

「じゃあ家に帰ってからが楽しみだな」

そう言つて不敵に微笑む。彼は陽太の前だから婚約者のフリをしているのだろうけど、春子にとっては戸惑うばかりだ。

「オレ、こんなに楽しそうな組長、初めて見ましたよ」

陽太が前を向いたまま笑った。

「おい陽太、余計なこと言うな」

二人の過去まではわからないけれど、仲の良さは伝わってくる。ヤクザの組長と若頭の会話にし

ては想像よりもフランクで、気が抜けた。

「ここだな」

目的地には三十分ほど車を走らせて到着した。

虎将が先頭切つて雑居ビルの階段を上る。

そして二階にあるヒガシキャッシュサービスのドアを迷うことなくノックした。

「……失礼」

室内に入ると、ここに来るのは初めてなのに既視感があった。

顔が怖いチンピラ風の男たちが一斉にこちらを見る。

「……どなたです？ ってあれ？ 園田さんじゃないですか。電話無視すると思つてたらなんの用ですか？」

春子の家に来ることが多い闇金の男の一人が立ち上がり、近寄ってくる。

虎将がその男からかばうように春子の前に立った。

「これ、とりあえず四十万ある」

虎将は分厚い茶封筒を男に差し出す。

男は怪訝な顔をしつつ封筒を受け取り、中身を確認するとにやりと笑った。

「まだ利息分だけで二百万残ってるんですよえ」

「……その利息、なくしてくれないか？」

「……はあ？」

男の目つきが変わる。

「ちょ、ちよつと虎将さん！」

春子は焦って彼の腕を引いた。借金したのは自分なので、利息もきちんと払わなければいけない。いくら虎将が怖い顔をしているからって、それは無理なお願いというものだ。

男もさすがに態度を大きく変え、他の男たちも立ち上がってにじり寄ってくる。

「明らかに法外な利息だつてわかっているんだろ？」

「そんなのあんたに関係あんのかよ？ 俺らのバックには怖いお兄さんたちがいるんだぜえ？」

「知ってる。東雲組しのめだろう」

「え」

虎将が堂々と答えると男たちは呆氣にとられた。

「俺は吾妻組のもんだ。東雲とは兄弟やらしてもらってる」

「……お、叔父貴でしたか、失礼いたしました！」

男たちが勢いよく頭を下げるので、春子は呆然とした。

「いや。東雲が経営している会社については俺もよく知らない。こんなことをしてるなんて、ついさつき知ったくらいだ」

闇金のバックに虎将が知る人がいたらしい。なんという偶然だろう。

「今朝あいつにも話をした。法外な取り立てはやめろってな。お前には話が行ってなかったか？」

「え、ええ……ですが」

男たちは顔を見合わせ、もごもごと何か言いたそうにしている。

「上の言うこと聞かないとまずいんじゃないか？」

「……へ、へい」

「それから、園田春子が借りた金は必ず返すから、しつこい電話もやめてくれ。返済については俺が保証する。何かあったら吾妻組に話を通してからにしてくれ」

「……わかりました」

男たちは何も言えなくなつたようだ。

先ほどの威勢はどこへ行つたのか、大人しくあっさりと承諾した。

「じゃあな、頼んだ」

無事に話が終わり、闇金の事務所を出る。そしてビルの前で待っていた陽太の車に乗り込んだ。
「これでしつこい電話もなくなるだろ。次の返済は振込みにすればいいし、俺がまたついて行ってもいい」

「虎将さん……本当にありがとうございました」

お金ももちろんそうだけれど、さらに細かい交渉をしてくれた彼には純粋に感謝の気持ちでいっぱいだった。

「いや。俺の兄弟が悪いことをした」

「兄弟って……」

「一応言っておくが、血の繋がった兄弟じゃない。同じ組長に世話になつて兄弟盃を交わした

仲だ」

「な、なるほど……？」

専門用語を使われてもよくわからず、春子は首を傾げた。虎将と一緒にいると徐々に極道組織について詳しくなっていく気がして、わずかな受け入れがたさがある。

とはいえ、虎将と東雲組の組長はそれほど親密な仲だということはわかった。

その後は春子のアパートに行き、必要最低限の荷物を段ボールに詰めて車に積んだ。貧乏生活をしてたおかげで物は少ないし、男手があるおかげであつという間に終わった。あとは家具などの車に乗らない大きな物だけだ。

持ってきた荷物は虎将の家の、春子の部屋として割り当てられた部屋に運び込んだ。仕事を終えると、陽太はすぐに事務所に行くと言って家を出た。

すべて片付いたのは夕方で、最初から最後まで虎将は春子の手伝いをしてくれた。

「今日はありがとうございました」

「とりあえず終わってよかった。夕飯はどうする？ 外で食うか」

「あ……ごめんなさい。私、これからバイトがあるので帰りは遅くなります」

昨日は休みだったけれど、今日の夜はバイトだ。

「バイト？」

「はい。夜はファミレスでバイトしているんです」

「ああ、そういうば昨日そんなこと言っていたな。じゃあこれ、鍵を渡しておく。連絡くれれば迎

えに行くから」

「……ありがとうございます」

虎将の優しさにはまだ慣れないし、鍵をもらってこの家に帰ってくることにまだ違和感がある。それでも、今日からここが春子の家だった。

ファミレスのバイトはいつも通り。都会のファミレスは忙しい分に時給も良く、できるだけ稼ぐためにこのお店を選んだ。アパートからは遠かったけれど、虎将のマンションからだとなくなったので通いやすい。先ほど少し借金を返し、虎将が闇金に話をしてくれたので余裕もできた。いつもよりも心が軽いのは彼のおかげだ。

「園田さん聞いてくださいよくあっちのお客さんがしつこくて」

高校生バイトの友里が困った顔をしてホールから戻ってくる。

バイト仲間はほとんどが年下の学生ばかり。さらに夜が深くなるとフリーターも多くなるけれど、だいたいが春子よりも年下だ。そのせいか、週四日しか入っていないのにバイトリーダー的な扱いになっていた。

「あの席ね、わかった。次から私が接客行くよ」

「ありがとうございます〜！」

頼られるのは悪い気はしないけれど、春子も強いわけではない。内心では怯えながらも、これも年上の仕事だと割り切っている。ちょうど呼ばれてしまったので、バイトの子が怖がっていたテー

ブルに行くしかない。

「お待たせいたしました。おうかがいします」

ボックス席に座っているのは四人の男だ。大学生くらいの年齢で、ファミレスを居酒屋代わりに使っているんだろう。すでに酔っているのが目に見えてわかる。

「あれ？ さっきの子は？」

「……他の対応がございますので、私がおうかがいします」

「え、あの可愛い若い子がいいなあ」

わかつてるよ、と心の中で毒を吐きつつ、微笑みを顔に貼り付ける。

「でもお姉さんもきれいだね。お姉さんでもいつか」

「おうかがいします」

「えーと、じゃあレモンサワー四つと、山盛りポテトと唐揚げ！」

「承知いたしました。少々お待ちください」

はやく立ち去りたいのが態度に表われてしまう。春子がすぐに彼らから離れようとすると、手を掴まれた。

「あとはお姉さんがここに座ってもらって」

春子はぞつとして手を振り払った。心臓がバクバクと鳴り、叫びたい衝動に駆られたがぐつとこらえる。

「仕事中なので、申し訳ございません」

笑顔は保ちつつも声は冷たいのが自分でもわかった。握られた手が震え、もう片方の手でその震えを抑え込む。たとえ大学生に手を掴まれただけとはいえ、見知らぬ男に乱暴に扱われたら恐怖を感じる。

「……可愛げねえ」

男のうちの一人がぼそつと呟く。

「……失礼いたします」

腹は立ったけれど、あれ以上食いがられなくてよかった。キッチンのほうへ戻ってオーダーを通してこっそりため息をつく。

「園田さん、大丈夫でしたあ？」

「うん。私のことなら冷たいおばさんくらいにしか思っていないから、私が対応すれば大丈夫だよ」

友里が可愛らしく春子にすり寄った。高校生にとつて、大学生の男たちには自分よりもきつと恐怖を感じるはずだ。彼女を守れたことにはとつと、まだ震えている手をぎゅつと握りしめる。

夜が深くなるにつれ、変な客も多くなる。でも時給が良いので辞められない。ああいう客の居座りもわりと多く、ホールに男性スタッフがいない場合はちよつと怖い。夜には必ず男性スタッフがいてくれるけれど、さっきはちよつと交代前のタイミングだった。

それから面倒な客に振り回されつつも零時を回り、退勤時間になった。

「ただいま帰りました……」

家に着いたのは夜中の一時。今日はいつもより遅くなってしまった。

もう虎将は寝ているだろうとそと玄関の扉を開けたが、リビングの明かりはついている。

中央のソファには虎将が座っていた。

「おかえり。連絡してこなかったな」

「あ、近かったの……。夕飯、今食べているんですか？」

「ああ。俺もあれから仕事で外に出ていてな。春子は？」

「私もこれから食べますよ」

食材は二十四時間営業のスーパーに寄って買ってきた。遅い時間だったから、安く食材が手に入って運が良かった。

「これ食うか？」

「カップラーメンですか」

「ああ、俺はいつもこれだよ」

彼の手にはカップラーメンとコンビニのおにぎり。栄養があるとは思えないものだった。

朝の用意は、本当に春子のためだったらしい。

「食材買ってきたので、簡単なものなら作れますけど……余計なお世話かもしれないですけど、野菜を食べたほうがいいですよ」

「春子が作ってくれるのか？」

虎将の表情がパツと明るくなった。想像とは違った反応に少し驚く。どこか幼さがある期待の眼差しを向けられ、ほんの少し可愛いと思ってしまった。

「ええ。安いものしか買えないので私のいつものごはんになっちゃいますけど……」

「それでいい。食べてみたい」

「わかりました。ちょっと待ってくださいね」

自室に荷物を置いて、段ボールに詰めてきたキッチン用具を取り出す。

それからエプロンをつけて、さっそく作り始めた。

買ってきた材料はいつものもやしとネギ、たまご、それから鶏のささ身。炒め物にするつもりだったけれど、夜も遅いので中華出汁で胃に優しい具だくさんのスープを作ることにした。

冷蔵庫の中に何かあるかと一応確認したけれど、お酒しかなかった。食材や調味料も買ってきておいてよかった。

さっとスープを作ってカップラーメンを食べ終わっていた虎将の前に置く。

春子はごはんと一緒に食べるつもりだ。

「スープです。器があんまりなかったのでどんぶりですが……どうぞ」

ラーメンどんぶりの中に野菜スープを入れて出すと、虎将はカップラーメンとおにぎりを食べたばかりだというのにすぐにガツガツと食べ始めた。

「……うまい」

ぼつりと呟いて、虎将は驚いた顔をする。

人に料理を振舞うのは初めてだったのでほんの少し緊張していたが、その表情を見て安心した。

「お口に合ってよかったです」

「春子、料理うまいんだな」

虎将が意外そうに言いつつ、目を輝かせる。

「まあ……お金がないので工夫するしかなかったんですよ」

貧乏な春子にとって、食費を削るのが一番手っ取り早かった。

自分が我慢すればいいだけだし、工夫次第でなんとかなることも多い。

「また作ってくれないか」

「はい。朝と夜だったらいつも作っているの、虎将さんの分も用意しますね」

「今後は食費も払う」

「えっ、さすがにそれは申し訳ないです」

「いや。俺のために飯を作ってほしいし、節約飯だけじゃなくて普通の料理も食ってみたいから金は払う。痩せすぎの春子にはもっと肉をつけてほしいしな」

肉をつけるかどうかは別にして、確かに大きな身体の虎将にまでもやし生活をさせるわけにはいかない。

「……わかりました。虎将さんが喜ぶようなメニューも研究していきますね!」

食費をもらえるならパーティーは広がりそうだ。人のお金なのであまり高級なものを作る気はないけれど、もやし料理よりは良いものが作れるはず。

そう考えると、今までよりも料理をするのが楽しくなりそうだ。

遅い夕飯を終えてお風呂から上がり、自室に戻る。

明日は日曜日でまたファミレスのバイトのみだ。けれど念のために月曜日の仕事の支度を終わらせる。足りないものがあつたら明日中には用意しておかなければいけない。急に始まったここでの生活だけど、春子にとっては良いことしか起きていない。

虎将の婚約者のフリをしている間は一日二十万円もらえるし、セキュリティのしっかりした高級マンションに住むこともできて、与えられた自室は春子の住んでいた部屋がすっぽりと入るくらいの大きさだ。さらには食費も出してもらえるなんて、信じられないほどの好待遇。

良いことだらけで浮かれそうになるけれど、冷静に考えると虎将はヤクザ。もつと彼の素性を知りたいのが正直な気持ちだ。彼と一緒にいてどんな危険性があるのか、普通の生活をしてきた春子にとってはわからないことだらけだった。

「春子、寝るか?」

虎将が春子の部屋を覗きに来了。お風呂上りで、ボクサーパンツ一枚と肩にタオルをかけているだけだ。突然目の前に現れた鍛え上げた裸体に驚愕し、思わず目をそらす。

「ふ、服を着てくださいっ!」

「わかった、わかった。……これでいいか?」

すぐに黒いＴシャツを着てくれたので、ようやく虎将に視線を向けられた。

ただし下はボクサーパンツだけなので、そっちを見ないように無駄に意識を集中させる。

「もう……。虎将さん、ちょっと相談があるんですけど」
「なんだ？」

「虎将さんのお仕事、普段どんなことをしているのか教えてくださいませんか？」

「ああ……。いいけど、どうした急に」

「どの程度危険性があるのか知りたい、とは言えずに他の理由を考える。」

「こ、婚約者のフリをしていくうえで、相手について知るのは当然ですから！」

「……まあそうか。明日外回り行くから、ついて来るか？」

「はい、ぜひ！」

隠れて身辺調査をするわけにもいけないので、仕事があるならちようどよかった。

春子は二度頷いた。

「わかった。じゃあ今日は寝るぞ」

頷いてまだ片付いていない自室を眺めたが、足りないものに今さら気づいた。

「あ。そういえば、まだベッドないんですした」

家具などはまだ業者の手配をしていないので、ベッドはないし、布団も持ってこなかったで寝る場所がない。仕事道具や衣服や、キッチン道具などの小物を持つてくることを優先させてしまった。

「ん？ 俺のベッドがあるが」

「でも、一緒に寝るのはちょっと……」

「婚約者なら一緒に眠るもんじゃないのか」

「そうかもしれないですけど……誰も見てないのに婚約者のフリをする必要、あるんですか？」

「ある」

自信満々の即答に気圧されそうになる。

「そう、なんですか……？」

「昨日も一緒に寝たんだから、今さら気にすることもないだろ」

「それは、気づいたらベッドにいただけで……」

虎将が運んでくれたのは明らかだった。

ソファではなくベッドのおかげで快眠だったけれど、意識がある状態で一緒にベッドに入るのはまだ抵抗がある。

「いいから、どっちにしろここにベッドはないんだ、こっちに来い」

「……はい」

床で寝たくはないし、ソファで寝るのも許してくれなそうな雰囲気、春子は諦めた。

今朝目を覚ましたシンプルなベッドルームは真っ暗で、ベッドサイドのランプだけが淡い光を放っている。先にベッドに入った虎将を追いかけするように、春子も中に入った。

「……おやすみなさい」

なるべく虎将から離れ、端のほうで丸まった。妙な緊張感が春子を襲う。昨夜は気づかぬうちにこのベッドで寝ていたけれど、今は意識せざるを得ない。